資料3－4

国際教養大学におけるインターンシップの現状と課題

【概要】

国際教養大学は１学年 175 人定員の小規模大学であるが、全学生に１年間の留学を義務づけているために、全学生数のおおよそ４分の１は海外からの留学生である。

本学のカリキュラムでは、CCS200：インターンシップ（３単位）を開講し、学生が社会との接点をより多く持てるようにカリキュラムを構成している。

> 本学では「企業等体験実習(インターンシップ)」を奨励しています。学生は、在学中に各種企業や団体等において、インターンとして就業体験をすることができます。本学では、この取り組みを「Global Career Challenge（GCC）」と呼び、卒業後の進路について具体的な目標や意識を持って学んでいけるよう支援していきます。（選択 3 単位）
>
> 国際教養大学学生便覧より一部抜粋

海外提携校への留学中に、滞在国でインターンシップを経験し、単位認定を申請する正規生は１割から２割弱程度いる。彼らのほとんどは大学側の支援を受けずに自分で研修先を探し出し、自分で交渉をし、インターンシップの実施にこぎつけている。

翻って、海外提携校から本学への留学生は過去 13 年の間に、希望者は多数いるものの数件にとどまっている。その原因となるのが以下の３点である。

課題①　言語

国際教養大学では留学生向け日本語の語学の授業は開講しているものの、全ての授業を英語で開講しており、留学生は必ずしも日本語が話せるもしくは日本語学習に興味があるとは言えない。また、大学が所在する秋田では、英語話者を受け入れられる受け皿となる企業や団体はごくまれである。

課題②　立地

国際教養大学は米国リベラルアーツカレッジ同様に都市部に位置していない。受け皿となる企業や団体までの交通手段が限られ、さらに交通費の学生負担が大きい。

課題③　学生の希望とのミスマッチ

インターンシップを希望する留学生の多くは、ホーム校へ実績を持ち帰り、単位交換を希望しており、そのために１か月から１年の期間の活動を希望する。秋田（日本）では、１日~１週間が基本であり、留学生のニーズとのミスマッチがある。